「ドレッシング」

ゆり　（30 代）

我が家には 3 つのドレッシングがある。一つはイタリアンフレンチ、一つは和風ごま、もう一つはその時々によって変わる。ワサビ風味の洒落たものや、韓国系のピリ辛味のもの、にんじんだけを使った無添加のものとか。父、母、姉、弟。それぞれが好きなように、今日の気分でドレッシングをかける。食卓の中心に堂々と立つドレッシングは、まるでスポットライトをあびたヒロインのようだ。

「ちょっと、かけすぎ！」と母が父に注意する行為は、多分これで 30 回目。父は（あ、またやってしまった）という表情で和風ごまの蓋を閉める。母も同じく和風ごまを手にし、己の適量を守りながらそーっとかける。「私は今日はこれかな〜」と楽しそうにイタリアンフレンチを手にする姉を横目に、弟は「ちょっ自分も和風」と言って母からドレッシングを受け取る。私はその一連のやり取りをみて、誰にも触れられなかった一本を黙ってキャベツの千切りにかける。心の中で（いや今日のメニューはどうみてもワサビでしょ。みんなセンスないなー）と思いつつ、口にしたら生意気だとか言って馬鹿にされそうだから何も言わなかった。

結婚して一年目。ドレッシングが冷蔵庫に 3 本はないと、何故か不安になる。買い出しに行くと、意味もなくドレッシングコーナーに立ち寄っては新商品をカゴに入れてしまう。あまり見かけないタイプのドレッシングに出会うと、味が想像できなくてワクワクする。（今日はどんな風にドレッシングの話をしようかな〜）とニヤニヤしながらレジまでカゴを運ぶ。普段、スーパーに行った時は、買うものの量を調整する。重い調味料、たとえば酒やみりんの重さは不快。だけど、ドレッシングは不快じゃない。よれっとしたエコバッグに、全体のバランスを考えながらドレッシングの入れる方向を考える。大事そうにエコバッグを両手で抱えながら帰宅した。

帰宅後、夕食の準備に取り掛かる。そのとき一通のメッセージ。（ごめーん、今日は帰るの 10 時くらいになりそう...先にご飯、食べといてね。）と旦那からの通知。「了解！」のスタンプを押す私は、心の中で（今日もか...）と思う。料理を作り終わった後、一人で晩御飯を食べる。

そういえば、最近ドレッシングを使ってない。私はサラダがあっても、ドレッシングを使わないままご飯を食べていた。そうだ。そうか…と。最近、どうりで食事が味気ない。それはドレッシングだけの問題だと思っていたけれど、多分違う。家族がいて、その中心にドレッシングがいて。あの風景、あの団欒が、料理を楽しく、美味しくしていたのかもしれない。そう思うと、段々切なくて涙が溢れてきた。

結婚してやっと気づいた。家族との団欒が、どれだけ貴重だったかを。当たり前は、きっと当たり前じゃない。いつか終わりがくるかもしれない愛おしい時間を、忘れず、大切にしていこうと思った。